
彼女の奏でる唄

雨雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の奏でる唄

【Nコード】

N0766J

【作者名】

雨雪

【あらすじ】

英雄が平和を導いてから数年。

エルフォメラ王国立アカデミーに通う、『面白ければなんでもいい』レグと、『顔と頭はいいが口が悪い』デイズは、行き倒れの少年を拾う。

1..行き倒れ

エルフォメラ王国立アカデミー。通称、アカデミー。

そこは、年齢、国籍、人種を問わず、試験を通れば誰もが学べる学校。

放課後、二人の少年が第十二訓練場で組手をしていた。

一人は茶金の髪と青紫の瞳を持つ少年、レグ。

一人は黄金の髪とエメラルドの瞳を持つ少年、ディズ。

他には誰もいない広い訓練室は、環境設定により森になっている。

アカデミーの訓練室は環境を自分で設定することができる。例えば、船の上、砂漠など。

森は障害物が多く、頭脳戦を鍛えるのにとっても効果的だ。常に周りに気を配りながら戦わなければならない。

レグはディズの左肩目掛けて拳を打ち込んだ。ディズは後ろにさがって拳をかわし、レグから一定の距離をとる。レグはその距離をすぐに詰め、また拳を振りかざす。

何の変化もないレグの攻撃はディズに事も無げにかわされた。

「単調。計画性のない君の生き方を具現化したような攻撃だね」

ディズは余裕で口の端をあげる。そして再度向かってくるレグの拳を右手で流し、レグの足を払った。

「うわっ」

レグは横に転がり、手について起き上がって体勢を立て直す。

「ディ！ 態と攻撃しなかっただろ！」

頬を膨らませてレグはディズを指差した。

攻撃するチャンスは幾らでもあった。足を払うよりも脇腹にでも蹴打を打ち込んだ方が効果的だったはずだ。

「レグは弱いから手加減が必要かと思って」

「憐れむな!」

声と共にレグはディズに殴りかかっていく。

ディズは向かってくるレグの懐に入り鳩尾に打撃を加えた。

「う……」

レグは短く呻いて後ろに倒れた。

「僕の勝ち」

ディズがそう宣言した途端、森が普通の訓練室に変わった。

「れぐサン、でいずサン、オ疲れサマデシタ。マダ訓練ヲ続ケマス
カ?」

無機質な声が流れる。工学科がつくった武術訓練の補助システムだ。

「やるやる! 負けっぱなしは嫌だかな」

「やらないよ。早く帰りたい」

二人の声が重なった。

「えー? も、終わり?」

レグは身体を起こして不満そうに口を尖らせた。

もう既に上着を着て、鞆を持ち、帰る準備万端なディズはドアに向かっている。

「最初から一試合の約束だろ? それに、僕は武術科じゃない」

レグは武術科で体術を選択している。そしてディズは政治経済科所属だ。

ディズは入学試験時、全ての学科を受けた。そして全てに受かっている。その中から政治経済科をとった。

「だったら今からでも武術科に」

「嫌だね」

考える余地もなくディズは一瞬で断った。

レグは武術科でもトップの方にいる。最近、純粹に張り合える相手がいなくなってきたのが彼の密かな悩みだ。武術科は全員が武術好きの奴らばかりでなく、ただ軍に入りたいからというのが多い。貴族の坊っちゃんたちが軍の上層部に行くためにはこの学園の武術

科は大きな経歴となる。

出世するためだけに入学する者たちは多い。

そしてそれは武術科だけに留まらない。

ディズのいる政治経済科も文官を目指すなら通る道だ。

だから、アカデミーの九割が貴族やらどこぞの金持ちの息子娘だ。

レグとディズは平民。

レグはその社交的な性格からか友達が多かったはずだ。様々な階層、学科と仲が良い。

ディズはその真逆だ。名前を覚えている者すらほとんどいない状態だ。

「な、ディズ。もう一戦だけ」

顔の前で手をあわせて頼み込むレグ。

ディズはレグを一瞥して外への扉に手をかけた。

「駄目だね」

内側に引いて扉を開き、ディズはその動きをとめた。

彼の視線は下方向に向いている。

動かないディズを不審に思ったレグは立ち上がって彼のもとまで走った。そして、後ろから覗き込む。

「……行き倒れ？」

扉を開けたらすぐの場所に俯せて倒れているものは、おそらく少年だと思われる。服装と髪型から見て、だが。

「拾うか？」

ディズはその言葉には答えず、何事もなかったように少年の横を通りすぎようとした。

「おい。待て、ディズ。イタイケな子供を見捨てるのか？」

ディズは振り返り、不機嫌を隠さずにレグと少年を交互に睨み付けた。

「僕にそのガキを助ける義務はない」

「正論だな。人としては間違ってるけど」

レグは少年に近づいた。

屈んで倒れている少年の頬を叩く。

「生きてるかー？」

反応は帰ってこないが微かに息はしている。生きてはいるようだ。

「ちょっと、レグ。拾う気？」

少年を背負おうとしているレグに信じられないとでも言うようにデイズは顔をしかめた。

「とりあえずここに置いてくのはマズイだろう？」

ただ場所を移すだけなのか、それとも最後まで面倒を見るかはおいといて、人命救助が最優先。

「楽しいことになりそうだしなっ」

レグは心の底から楽しげな笑みを見せた。

完全にこれから起こるだろうことを楽しみにしている。

レグの近くにはトラブル巻き込まれ体質の少女がいるので、経験と勘で面白そうなことが起こる前兆がわかるようになっていた。

だから、この少年の抱えているものは、あくまでレグ基準で、楽しそうなことらしい。

「馬鹿じゃないの？」

デイズはそう吐き捨てる。

レグとデイズの付き合いは三年ほどだが、相手の考えていることくらいわかる。性格だって把握済みだ。だから、とめることすら無意味だとわかった。

今デイズのすべきことは、レグをとめることではない。どうやって余波を最小限に食い止めるかだ。

デイズはもう少年を背負って歩き出しているレグの後ろを追った。

「ん、ディ。ついてくんの？」

「君一人にやらせると、確実に家まで持ち込んでくるだろう？　そうすると、アリスさんに迷惑がかかるからね」

アリスという名がでた瞬間、レグがピクリと反応した。

「お前ホントにアリスのこと好きな」

「今更。そんなことわかりきってるだろ？　お互いに」

そう言うデイズは静かに空を見上げた。

2..食堂

レグたちは、真っ直ぐに食堂へ向かっていた。なぜ医務室ではなく食堂かというと、先程拾った少年の腹が盛大に鳴ったからだ。

考えるまでもなく、少年が倒れていた理由が想像できた二人は、目的の地を食堂に定めた。

食堂に行くまでの道で、レグとデイズは、ほぼ全員の視線を集めていた。

これは、レグが子供を背負っているからという理由ではない。いや、それも少しはあるがそうでなくても二人は注目されていた。

レグとデイズ。二人が普段の学校生活の中で大いに目立っているからだ。

レグはよく喧嘩を売られる。面白いことが大好きな彼は、何かにつけて他人にちょっかいをかけ、恨みを買うこともしばしばある。反対に感謝されることもあった。良い方、悪い方、どちらにしろその知名度は半端ではない。

デイズは六年生でもくるとの少ない王宮の文官への推薦状が、三年生できたほどの頭の良さと、美少年であること。それらから、特に女子の間での人気が高かった。無愛想なところも乙女心を撥るらしい。本人は鬱陶しく思っているようだが。

レグは男友達に声をかけられ、デイズは女子生徒から黄色い声を浴びせられている。

にこやかに手をふるレグと、一切を気にとめないデイズは、食堂に入った。

「おばちゃん。何か食うもんじゃない？」

食堂の人間とも親しいらしいレグは、食堂に入るなり声を張り上げた。レグは毎日弁当を持参しているはずなのに、なぜ食堂の人間と親しいのだろうか。

「ああ、レグかい。ちょっと待っとくれ。昼の残りがある」

厨房から顔を出してから、そう言ってすぐ顔を引っ込めたのは、この食堂の主だ。

四十代後半のふくよかな女性で、性格が男前なおばちゃんだ。

レグが一番近くのテーブルに座った。向かいの席にディズが腰掛け、少年はレグの隣に寝かせる。

「うーん。コイツさ、どつかで見たことあるんだけど」

レグが突然そう言うと、ディズは机に頬杖をつきながら馬鹿にしたような目でレグを見た。

「当たり前。まあ、レグ程度の記憶力じゃ覚えてられないか」

「む。俺だってやればできる子なんだぞ？」

「それって使えない奴の常套句だよ」

ディズの中ではレグは使えない奴らしい。

「むむ。まあ、使えない奴でいいから、コイツ誰？」

レグが訊くとディズは大きな溜め息を一つ吐いた。

心底呆れているようだ。

「今朝、新聞に載ってた」

「んー？」

レグはディズの後ろから確かに新聞を覗き込んでいたが、一つの記事を凝視してただけだった。

「レグって馬鹿？ レグも見てた記事だよ」

レグは首を傾げた。記憶の片隅にも残っていない。

「これ、エイノス・ティルの一人息子だよ」

この世界に暮らす人々は、大きく二つの種族に分けられる。

霊族と魔族だ。

霊族は何の力もないごく普通の一族だ。殆どの者が金髪で、白い肌をもっている。

魔族は何か一部の能力が優れた者のことだ。例えば、力が強かったり、火が出せたりする。魔族は霊族を基本に、身体の一部が進化している者が多い。爪が長かったり、翼がある者もいる。霊族の容姿が大体同じなのに対して、魔族というくくりの中でも色々な姿の者

がいたのだ。

五十年ほど前までこの東大陸では、魔族が霊族の支配下に置かれていた。魔族の方が霊族に比べて圧倒的に数が少なかったため、数にものを言わせて霊族が魔族を従わせていたのだ。

しかし、西大陸からやって来た一人の魔族の青年が、魔族を決起させたことから、霊魔戦争は始まった。

霊魔戦争とは霊族と魔族の大陸規模の大きな戦争で、数十年に渡って繰り広げられた。そして、十年ほど前にやっと戦争が終わった。その方法は、和解だった。

エイノス・テイルと言えば、霊魔戦争の霊族軍トップの人間だ。

和解するまでに数十年。エイノス・テイルの一族は、ずっと霊族の陸軍総司令を務めていた。

レグは改めて、少年をじっくり見た。

そして、

「……エイノス・テイルとは似てないな」

そう一言呟く。

確かにそうだとデイズも思ったが、レグと意見が合うことは癪なもので言わないでいた。

「で、ディ。コイツの名前は？」

「ソーマ、です」

親指で少年を指しながらきくレグに応えたのは、デイズのめんどくささが全面に押し出された声ではなく、少年、ソーマ自身のものだった。

「あ。起きたか。ソーマだな。俺はレグ。こっちの無愛想なのがデイズだ。よろしくな！」

後ろで花でもとんでそうなくらい明るく笑ったレグに、ソーマは小さく微笑んだ。

「えっと、ここ……？」

ソーマはレグに窺うように視線を向ける。

「アカデミーだよ。聞いたことくらいあるだろう？」

ソーマの目が見開かれた。

「じゃあ、ここはエルフォメラ王国ですか？」

嬉しそうにそう言うソーマに、レグは笑いながら頷く。

「それよりさ、ソーマ。とりあえず倒れるくらい腹減ってんだろ？
なんか食えよ」

そう言ってレグはサツと立ち上がると、食堂のカウンターへ向かう。

「おばちゃん！ まだ？」

カウンターの奥へとレグが声を張り上げる。

「はいはい、どうぞ」

「あんがと」

レグに食事ののっているトレイを受けとり、おばちゃんにニツと笑った。そして、思い出したように片手でトレイをもちかえる。空いた方の手でポケットをまさぐり、銅貨を一枚取り出してカウンターに置いた。

「毎度！」

食堂に案外広い食堂に響き渡るくらい大きな声でおばちゃんと言った。

その声に驚いたのはソーマ一人で、レグは相変わらずの笑顔だし、デイズは不機嫌そうに頬杖をついている。

レグはトレイを運んできて、ソーマの前に乱雑に置く。その時に味噌汁が若干溢れたのをデイズが机の上にあった台拭きで律儀に拭く。手際がいい所を見ると、これは日常なのだろう。

「ん、ソーマ。ほら食え」

「あ、ありがとうございます」

そう言ってソーマはトレイに目を移す。

かと思えばレグに視線を向け、デイズをチラリと見て、またトレイに視線を戻した。

「食わねえの？ 毒は入ってないと思うけど……」
レグの発言にデイズは、これでもかというように深い溜め息をついた。

「な、なんだよデイズ」

「食べれないんだよ。そうだろ？ 子供」

ソーマはおずおずと頷いた。

「んー？ 何で？」

レグは全くわからないとでもいうように首を傾げる。

デイズは立ち上がり、カウンターに行って何かをそこから取る。そして、戻ってくるそれをソーマに差し出した。

それは、先が三つにわかれたスプーンだ。

ソーマはそれを手に取りしっかり握り込む。

「あ、ありがとうございます！」

デイズを見上げるソーマは心底嬉しそうだ。対するデイズは目も合わせようとしない。

「あー、そっか。ソーマは霊族なのかあ」

レグはトレイから箸をとって掌や甲を使って弄びながら、デイズを見てニヤリと笑う。

「優しいなあ、デイズ」

霊族と魔族では食習慣が違うため、使う道具も違う。霊族はスプーンやフォークを使うが、魔族は箸を使う。霊族はほとんど箸が使えない。ソーマも例外ではなく使えなかった。

元の席に戻ったデイズはレグと目を合わせようともせず、ソーマを見ていた。

「で、ガキ。何でこんなところに居るわけ？」

デイズの容赦ない言葉に、ソーマはビクリと肩を震わせる。睨みつけるかのようなデイズの視線から逃れるかのようにソーマは俯いた。

「デイー。可哀想だからあんま苛めんなよ」

レグは舌をだして片目を瞑る。実際のところ、この言葉は彼の本心ではないのだろう。

「どうしても、会いたい人がいるんです」

ソーマの強い意思を宿した瞳はアメジストの輝きを放っている。しばらく沈黙が続き、最初に口を開いたのはデイズだった。

「だから？　だったら何でアカデミーにいるわけ？」

「何だよ、ディ。ソーマはアカデミーに会いたい奴がいるのかもしれないじゃん。なあ？」

「レグ、君の頭の悪さには憐れみすら覚えるね。さっきその子供は“ここはエルフォメラ王国なのか”と言っただろう」

レグはあつと声をあげる。ソーマはここがアカデミーということより、ここがエルフォメラ王国であることに反応していた。つまり、ソーマにとって大事なのはここがアカデミーだということではなく、ここがエルフォメラ王国であるということになる。だったらアカデミーには用はないはずだ。

「もう一つ。君は確か昨日までゴート帝国に居たはずだ。新聞に記事が載っていたから間違いない。何故十六区にあるアカデミーに入って初めてここがエルフォメラ王国であることを知った？」

ゴート帝国はエルフォメラの北に位置する。十六区はエルフォメラ王国の中でも南に位置する区で北にある他の区でここがエルフォメラ王国であると気づくはずだ。

それに、十六区のアカデミーの南にはもう十七区しかない。十七区は特殊な区で外からの客など滅多に來ない。十七区に用がある者は相当の訳ありか、もしくはは相当の変人と相場が決まっている。こんな子供がそんな十七区の間人を知っていて、用があることは実質有り得ないのだ。

そして、ゴート帝国とエルフォメラの国境からアカデミーまでは最速でも七日はかかる。一日では無理だ。物理的にこの少年がここに存在することはおかしいのだ。

何もかもが合点しない。

「そ、それは……」

ソーマは狼狽えた。

可哀想なくらい震えて、泣きそうな顔をしている。

「まあ、僕には関係ないけど」

ディズは、そこまで言及しておいて答えを求めない。まるで微塵も

関係ないかのように。

「そ、です。あなたたちには関係、ありません」

「レグ、帰るよ」

抑揚のない声でそう言うと、音をたてずに立ち上がった。

「でもさ。元霊族軍の総司令殿のご子息に恩を売っておくのも悪くないと思うけど？」

にやっと笑うレグにデイズの深くて長い溜め息が聞こえた。

「そうと決まれば、善は急げ。ソーマの今日の寝床確保だ」

呆けるソーマを他所に、レグは一人上機嫌だった。

3..寮

寮生以外は立ち入り禁止と言われる寮は管理人のオバサンによって固く守られている。

レグとデイズは通学生のため、この寮には入れない。レグの人脈をもってしても、この寮だけはどうにもならなかった。

その後、デイズはソーマの寢床を提案した。それがこのアカデミー学生寮だった。

ソーマを寮に匿おうなど無理にもほどがある。

そんなことを知らないのか、興味ないのか、デイズは寮の戸に手をかけた。

「ちよ、デイ！ 無理だって！」

レグはデイズの腕を掴んで引き留める。

デイズは何も言わずにその手を振り払って寮の中に入ってしまった。それに仕方なくレグとソーマも続く。

「失礼します。忍、いますか？」

管理人室に入ってそう訊くデイズに、レグは心の底から終わったと思った。

これだから下手に人付き合いがない奴は困るのだ。デイズはこの寮の規則さえ知らないに違いない。

管理人の怒声が飛ぶ、レグはそう覚悟した。

「いらっしやい、デイズ君。高槻忍なら部屋にいるわよ」

猫撫で声。

デイズってここの管理人と仲良かったんだ、とレグは密かに心の中で感心した。というより一方的に気に入られた感じか。デイズは口さえ開かなければ顔はいいし。年上には一応、敬意を払えとアリスが言っていたからそれを律儀に守っているのだ。ただ、本当に『一応』だが。

「ありがとうございます」

そう言ってデイズに見惚れている管理人に『一応』頭を下げて管理人室から出る。

「デイズさんって何だか凄いんですね」

ソーマは隣のレグにこそっと耳打ちする。

「んー、まあ、凄いっちゃ凄いけどさ」

変な方向に。その言葉を含む。

レグは自分たちを置いて階段を上がり始めているデイズに視線を向けて失笑した。

高槻忍はエルフォメラ王国の人間ではない。翹苑国からの海外留学生だ。

翹苑国は数少ない魔族の国で、忍自身も魔族だ。対して、エルフォメラは霊族の国である。

霊魔戦争が終わって随分経つが、霊族と魔族の蟠りは消えたわけではない。アカデミーも人種は問わずと言ってはいるが学生のほとんどが霊族だ。そしてその大半が貴族だった。

つまり、魔族への差別意識の塊の親に育てられた子供たちだ。

当然というか何というか、忍は学園で嫌がらせをされている。言い方を変えれば苛められていた。

貴族に煽られて平民も加担して忍を、魔族を退学に追い込もうとしていた。

でも忍には絶対に退学できない理由があって、耐えるしかなかった。正面から喧嘩したら自分が悪者になることは解っていたからどうにもできなかった。

だけど。

「……い。おい、起きろ。大馬鹿」

「ん、……………っデイズ!？」

寝起きからテンションが高い忍にデイズは迷惑そうに顔をしかめた。

「めっずらしー。魔族だ」

忍は顔を青ざめた。

日に煌めく髪は霊族の証。
それ以外は魔族とされる。

「蒼の髪！　ってことは、『海』の魔族？　綺麗な色だし、もしかして王に近い家系？」

目を輝かせながら問うレグに忍は呆然とする。

「煩いよ、レグ。忍、いつまでぼーっとしてる気？　折角来てあげたんだから、お茶いれてよ」

レグ。その名前を忍も聞いたことがあった。一日一度は聞く名だ。それはディズからではなく、あくまで噂でだったが。

忍が何でこんな所に来たのだろうと考えていると、忍の中では学内唯一の友人のディズと仲が良かったかもしれないと思いあたった。寝惚け気味の頭でそんなことを思っていると、友人が笑っていることに気づく。だが、目が全く笑っていない。

「茶」

一言だけそういうと、ディズはまるで自分の部屋かのように勝手に座布団を引っ張りだして座る。

「はい、了解です」

そうして、忍は台所へ向かう。

「あのー、良かったら、座っててください」

はしゃいでいるレグと物珍しそうに部屋を見ているソーマに声をかけて台所に消えていった。

「ディ。お前、友達いたんだな……」

ディズは不満そうな顔をしたが、否定はしなかった。

「ディズ、お待たせ」

台所から戻ってきた忍の手にはお盆があり、それを卓袱台の上にのせる。そしてその上にのっていた四つの湯呑みを卓袱台に移して、まだ立っている二人に座布団を出してきて座るように促した。そして自らも座布団の上に座る。

「えーと、じゃあ、自己紹介ってことで。俺はレグ」

「あ、高槻忍です」

会話が続かなくなって困った忍は、片手で湯呑みを持ってお茶を飲んでいるディズに視線を向けた。しかし友人は興味なさそうに明後日の方向を向いている。

「あー、えーと、お茶菓子だしますね」

「餓鬼。君は自己紹介もできないの？」

ディズは何かに苛立っているように湯呑みを置いてソーマ見る。

「え、あ、だって、こいつ魔族だし……」

霊族でも上流階級に入るティル家の人間であるソーマは魔族に偏見があった。

小さい頃から魔族は敵だと教え込まれて育った。

ソーマの言葉に一瞬時が止まったように感じたのは忍だけだったように、レグもディズも表情一つ変えない。

「ま、当然の反応だよな」

珍しくも何ともない極一般的な反応をからかう様にレグが笑う。

「ソーマって案外お子様なのな。流石いいとこの坊っちゃんってカ
ンジ」

「そんなことはどうでもいいよ。君は今日からここにお世話になるんだから、その幼稚で愚劣な態度、どうにかした方がいいんじゃない？」

「はあ!？」

「ええっ!？」

二人は揃って声をあげた。

つまり、最初からソーマはまさかと思っていたが、ディズは自分を魔族の部屋で寝泊まりさせる気なのだ。

「ちょ、ふざけんなよ、ディ。マジ無理。管理人のオバサンに見つかったら殺されるって!」

「お願いします! 嫌です、やめてください!」

二人は同時に抗議するが、聴く気がないディズは湯呑みを置いて立

ち上がった。それにレグも倣う。

「じゃ、がんばって」

そして二人は、部屋から出ていった。

霊族と魔族。そのどちらかに生まれたなら、一度はもう一方を憎み、そして羨む。

ソーマもそうだった。

ソーマの友人の父は霊魔戦争で亡くなった。近くに住んでいる人の中には魔族に殺されたという人も沢山いる。憎んでいないと言えは嘘になる。

しかし、魔族の持つ肉体的な強さに憧れているのも事実だ。

忍も長年魔族を虐げてきた霊族は憎いし、嫌いだけれど、彼らの作り上げてきた文化や、何よりその容姿は羨ましいと思う。

けれど、憎しみ以外を彼らが表に出すことはなく、解り合える日はきつとずっと遠い。或いは、来ないかもしれない。

「嫌だったら、出てっていいよ」

それは、裏を返せば嫌じゃなかったら居てもいいということ。忍の最大の譲歩。

「……よろしく、お願いします」

それは、ソーマの妥協。取り合えず魔族と野宿では魔族が勝ったという、ただそれだけのこと。

4…エルフォメラ王国第十七区

エルフォメラ王国第十七区は、王国の干渉を受けていない。

十七区は四十年前、王に見放された。当時、戦争の真っ只中で十七区は侵略され、その際に十七区は国から切り捨てられた。住民たちは当時の王に失望し、以後、十七区は王国からは事実上独立した存在になる。

十七区と隣接する十六区との間は大きな壁で仕切られていて、唯一往来できる関所には優秀な結界能力をもった魔族が詰めている。通れるのは十七区の間と商人だけだ。

今、エルフォメラは十七区を統治下に置きたがっている。そして、十七区はそれを拒否していた。

エルフォメラ王国第十七区には港がある。

「楽、もう上がっていい」

作業している手をとめて、楽が振り返る。

楽は船乗り見習いだ。十七区を拠点にあちこちに物資を運んでいる貿易船に、三月前から見習いとして乗っていた。

今は一度目の航海から帰って来たところで、商品を船から降ろし終わったところだ。

「漣さん。え、でもまだ」

「メシ、付き合え」

楽は十七区の間ではない。他国の孤児だったところを漣に拾われた。

実際のところ、十七区の間とは全くわからない。泊る場所は船の中でいいとして、食事は正直どうしたらいいか悩んでいたところだった。

「はい、ありがとうございます！」

漣の然り気無い気遣いに楽は甘えることにした。

「あー、漣さん！ 北の入り江に変な船あるんすけど」
船乗りの一人が漣に遠慮がちに進言した。

「その船に、えーと。アリスちゃんに乗っていったっていうのを見た奴がいるみたいなんすけど」

「アリス！？ またか！」

漣はトラブル巻き込まれ体質の少女に頭を抱えた。あの馬鹿がまた何か厄介なことに首を突っ込んでいるのかと思うと頭が痛くなる。アリスという少女はいつも何かしらの事件に巻き込まれている。容姿が少し変わっているせいもあるが、それはもう体質だと思わないとやっていけないほどにトラブルに巻き込まれている。しかし、それは全て彼女の意思ではない。だからこそ、質が悪い。彼女のせいであれば責めることもできるが、いつも巻き込まれているだけなのだ。責められるわけもない。

「誰、ですか？」

楽が話しかけてきた強面の船乗りに訊くと、強面の船乗りは眉を寄せる。

「アリスちゃんはな、うーん……漣さんの知り合いっつか……」

歯切れの悪い言葉に楽は首を傾げた。

漣は一人でブツブツ言っていて、楽の疑問には応えてくれそうもなかった。

「あ、漣さん。こんにちは」

「ああ」

通りすがりの少女にかけられた言葉に漣は適当に応える。声をかけた相手は、そのまま歩いて楽の前まで来た。

「こんにちは。漣さんの船に新しく乗った子って貴方ね」

楽は一瞬自分の目を疑った。

その少女の髪と瞳は漆黒だった。

「闇……」

それは闇族の特徴だ。闇族はその名の通り、闇を司る。彼らは滅多に人前には姿を現さず、その容姿だけが人伝に広がって、噂ばかりが一人歩きしている種族だ。しかし、その稀少性は他に類を見ない。「あー！ アリスちゃん！？」

強面の船乗りが黒髪の少女に駆け寄る。

「久しぶりすね。さっき変な船に乗ってなかったすか？」

「お久しぶりです。ああ、はい。ちょっと誘拐されかけまして」

「無事で何よりっす！ 漣さーん！」

「ああ？」

不機嫌にこちらを見てくる漣は彼女を見た途端、目を見開いた。

「アリス、いたのか？」

「あれ、さっき挨拶したんですけど……漣さん、もしかして気づいてませんでした？」

漣はバツが悪そうに眉を寄せて、楽たちの方へ近づいてくる。

そして黒髪の少女、アリスの前に立つと腰に手をあてた。

「変な船に乗っていったときいたが？」

「いつものこと、でしょう？」

静かに怒りを滲ませる漣に、アリスは笑顔で返す。

「もっと危機感をもて」

「心配してくれてありがとうございます」

「全く、お前は……」

楽から見ても苦笑する漣は、どこか安心していうようで、表情が柔らかい。アリスという少女が何者かは知らないが、漣と懇意にしているのだからいい人なのだろうと勝手に想像して、楽はアリスに好印象を持った。

「ああ、もうこんな時間か。今からコイツを連れてアリスの店に行こうかと思ってたんだが、いいか？」

そう言いながら漣は親指で楽を指す。

「はい、大丈夫ですよ。えっと……」

「ああ、コイツは楽。楽、アリスだ」

漣が簡単に紹介すると、アリスは楽に向かってにこりと笑った。その瞬間、楽の顔が紅潮する。

アリスはまずその髪と瞳の色に最初に注意がいきがちだが、実はアリスは美少女だ。楽の見た——と言ってもたかが知れているが——どんな人間よりも綺麗な少女だった。

「楽です。よろしくお願ひします……」

「よろしくね、楽くん」

楽もつられて微笑むと、漣も口の端を上げて笑んだ。

「アリスさん！」

遠くで声が聞こえたと思えば、それは楽の前を通り過ぎ、アリスの元へ行った。

「家にいないから心配したんだよ」

それは、少年だった。

可愛らしく微笑んで、同じくらいの背丈のアリスを見つめる。

こちらにも、アリスに見劣りしない程の美少年だ。ただ、彼の場合は金髪でどこにでもある色なので、彼自身が目立つ。

「おかえりなさい、ディ君」

「ただいま、アリスさん」

「学校は楽しかった？」

「いつもと同じ。退屈だよ。そんなことより僕はアリスさんの店の手伝いがしたいのに」

恨めしそうにアリスを見る少年、ディズは抗議するように片頬を膨らます。

「ディ君は、今はたくさん知識を吸収して、色々なものに触れるといいよ。学校を卒業して、それでも店を手伝いたいんだったら、そうすればいい」

アリスはたしなめるように言うと言手をディズに差し出す。

「帰ろう、ディ君」

「うん」

アリスの手をとってディズははにかむ。そして、どちらからでもな

く歩きだした。

仲の良い恋人だと楽は思う。美男美女でお似合いだ。手を繋いでいる様子も可愛い。

「呆れるだろ？ あれで恋人同士じゃないんだぞ」

「ええ!？」

楽は思わず声をあげた。お似合いな二人なのだと思う。しかし、それは楽の中で勝手に考えていることに過ぎなかったらしい。

「俺たちも行くか」

そう言って漣は強面の船員と一言二言話すとアリスたちの後を追って歩きだした。それに倣って楽は漣の背を追った。

5..店

レグはソーマと別れた後、デイズとも別れ、一人ふらふらと十六区を歩いていた。

放課後、用がなければすぐ家に帰るデイズと違って、レグは必ずと言っていいほど寄り道をする。しかし、その大半には目的がない。目的もなく歩くことがレグは好きだった。

「さて、そろそろ帰るかな」

一人でそう呟いて、レグは彼の家へと向かった。

レグは自分の家の前で足を止めた。中は随分賑やかなようだ。溢れてくる笑い声は他のどの家よりも大きい。きっと夕時だからだろう。その家では、レグの家主であり、保護者であるアリスが料理店をしている。

レグはなんの躊躇いもなしに、表から中へ入った。扉に取り付けてあるベルは、客の訪れを告げる。

「いらっしやいませ」

レグに空いたテーブルを片付けながらアリスが声をかける。入ってきたのがレグとわかると、アリスはにこりと微笑んだ。

「レグ君、おかえりなさい」

「ただいま、アリス」

アリスは夕時だからか忙しそうにしている。レグはそんな彼女の様子を尻目に中へと進んでいった。

「レグ、遅いじゃん。もう真っ暗だよ?」

「寄り道はほどほどになー」

見知った常連の客たちは店の中を歩いていくレグに声を

かけ、酒を煽って楽しそうに笑う。

客たちに向かって笑いながら、レグは一つのテーブルで足を止めた。

「漣じゃん。戻ってたんだ？」

「ああ、レグ。久しぶりだな」

レグは漣の隣の席に腰掛け、通学用のボロボロになった指定鞆を空いている席に置いた。

まだ料理は来てないようで、水が二つ置いてある。そこでレグは見覚えのない少年に気がついた。

「あれ、新顔？」

「楽。拾った」

レグは上から下まで楽を無遠慮に観察し、頬杖をついて笑う。

「よろしくなー、楽。俺はレグ」

「あ、はい」

楽は慌てて頭を下げる。

「しかし、アリスといい漣といい、よく色々拾ってくるよなあ」

レグが感心して溜め息を漏らすと、負けじと漣も息を吐く。

「まあな。俺は使えるものは拾う主義だからな。アリスは何でお前を拾ったんだか。お前、全く役に立ってないだろう」

「酷いなあ、漣は。俺だって役に立ってるって」

「何のだ」

「癒し？」

「ディズを見習え」

漣はレグの後ろの方を指差す。レグが振り向くと、ディズが無表情でオーダーをとっていた。

「愛想がないところを？」

「アリスの手伝いをしているところを、だ」

レグは漣の方に向き直る。

「やだよ。アリスはそれを望んでないからね」

アリスはレグたちに店を手伝って欲しいなんて望んでいない。

アリスはレグとディズの保護者だ。アリス自身の外見年齢は15歳

前後だが、実年齢はわからない。だが、少なくともレグとデイズより年上で、少女と呼ぶには不釣り合いな考え方をしていることだけはわかっている。そして、子供はたくさん遊んでいいというのがアリスの教育方針だ。

「ちよっとレグ！ また表から入ってきたの！？」

レグが怒鳴り声に振り向くと店のエプロンをつけたデイズが、睨んできた。

つかつかと歩いてきてレグの前に仁王立ちをしたデイズは腰に手を当て、怒りを体で表現する。

「裏から入ってこいって言ってるだろ？」

「固いなあ、ディは。いいオトナになれないよ？」

「レグが言う『いい大人』にはなりたくもないよ」

「レグ君、ディ君」

第三者の声が聞こえて、レグとディズは勢いよくそちらを向くと、手に料理を持ったアリスがいた。

ディズは素早くテーブルの前から避け道を譲り、アリスは漣の前にオムライス、楽の前に和風定食を置く。

「お待たせしました。和風定食とオムライスです。食後に甘味をお持ちしますね」

「あ、あの」

アリスがテーブルから離れようすると、楽が思いきったように声を出す。

アリスが首を傾げて楽の言葉を待つが、楽は口を開いて閉じることを繰り返すだけだ。それでも辛抱強くアリスが待つと、ようやく言葉絞り出す。

「俺、お金あんまりなくて、これって幾らなんですか？」

和風定食を指して楽が訊くと、アリスは一瞬驚いた顔をし、次に楽に向かって微笑んだ。

「気にしないで大丈夫ですよ。楽くんの十七区に来たお祝いですから」

「え……で、でも」

「この店は半分以上、私の趣味だからいいんです」
そう言ってアリスはテーブルから離れていった。

「楽、アリスの厚意だ。受け取っておけ」

「こそ。食材とかも大体は商人たちが差し入れてくものだし、アリスは営利目的で店をやってるわけではないからね」

漣とレグが揃って言うとな、楽は少し安心したように笑った。

食べ物がないのは楽にとっては死活問題だから、タダ飯にありつけることはかなり嬉しい。

楽はありがたく目の前の料理を食べることにした。

「おいしい」

楽はそう呟くともっと美味しく感じられた気がした。

「当たり前だろ。アリスさんがつくったんだから」

デイズがそう言い捨て、仕事に戻っていった。その姿はどこか満足そうだった。

「そう言えば、楽って霊族だね？ 何で魔族の名前？」

食事を摂る楽にふとレグが疑問を投げた。

確かに楽の髪は色素の薄い金髪で、容姿的に見れば霊族に分類される。

「楽の名前は俺がつけた」

漣が口の中でものを頬張りながら答える。そしてしばらく咀嚼してから飲み込み、続きを話す。

「楽には悪かったが霊族の名はよくわからなくてな。魔族の名をやってた」

「へえ」

感心したようにレグは口笛を吹く。

「由来は『楽しく生きろ』からだそうです」

楽が嬉しそうにレグにバラすと漣が動揺の色を浮かべる。

レグはニヤリと笑って漣を一瞥するが、何も言わなかった。

「レグさんの名前の由来は？」

楽が乗り出して訊くとレグは考える素振りをした。

「さー？ どうだったかなー。忘れた」

その様子が余りにも態とらしくて、楽はすぐに嘘だと知る。レグは話してくれる気はないようだ。

「レグさんは秘密主義？」

「秘密は最高の装飾品。時として最強の武器。或いは最大の弱点」
訳がわからないことをすらすらと言って、レグは席を立った。

「よく考えるといいよ」

鞆を掴んで去っていくレグの後ろ姿を眺めながら楽は首を捻った。
一体何なのだろう。

「難しく考えるな。そのままだ」

漣は呆れたように嘆息し料理を口に運ぶ。

漣の言葉も聞かずに、楽はしばらく考え込んでいた。

夜も更けて客が疎らになった頃、漣が用をたしに席を立ったので、

楽は一人で甘味を味わっていた。

楽は甘味を口にするのは初めてだ。

拾われる前は残飯あさりをしていたし、漣たちの船に乗ってからは男所帯で甘いものに興味を示す者が少なかったせいだろう。

何でも白玉餡蜜という食べ物らしいそれは、見た目は食べられるの
だろうかと疑いたくなるような色だったが、おそろおそろ一口食べ
ると驚くほど甘かった。これが甘いということだと初めて知った。

「楽くん」

「あ」

突然声をかけられて、楽は慌てて声の主を見る。

「アリス、さん」

「座ってもいいですか？」

「え、あ、はい！」

椅子をひきそれに座るアリスを思わず凝視してしまう。

長い髪は夜よりも深い漆黒で反対に肌は透き通るように白い。

「漣さんは？」

「あ、トイレに……」

「そう。漣さんは優しいでしょう」

「はい、とても。でも、」

優しくしてもらっても何も返せないのに、とは言えない。

この人、アリスも漣の側だから。

『アリスは何でお前を拾ったんだか』

この人は、他人を拾ったことのある人。

「少しね、安心してゐるの」

アリスが唐突に話し始める。

「寂しがり屋なのよ」

「アリス、余計なことを言うな」

トイレから戻ってきた漣がアリスを睨み付け、荒々しく椅子に座る。

「これ、拗ねてるのよ」

漣を指差しながらからからと笑うアリスに対し、漣は怒りを募らせていく。

「アリス！」

声を荒げる漣に楽は思わず笑ってしまった。

「もうあっち行けよ」

漣の口調が幼くなり、完全に臍を曲げた。

楽には初めて見せる表情だ。漣は元から表情が乏しく、よく見えないと感情の動きを取り零してしまう。そんな漣がここまで表情を変えるのは珍しい。

珍しいことは見ておかなければ損だからと楽は漣を凝視していた。

アリスはおかしそうにクスクス笑って厨房へ戻っていった。

「楽、そろそろ帰るぞ」

漣が冷やを一気に煽り、楽は残り一口の甘味を口に入れた。

銅貨を一枚置いて席を立つ漣に続いて、楽も立ち上がり漣を追いか

けた。

「アリス。金、机の上」

まだどこかふて腐れている漣が、厨房を覗き込んで皿を洗っているアリスに声をかけた。

アリスは手を止めて厨房から出て二人のもとへ走ってきた。

「漣さん、楽くん。また来てください」

「しばらくこっちいるから気が向いたら顔出す」

ぶっきらぼうな漣の言葉にアリスはまた笑う。

「ありがとうございます」

踵を返して漣は外へ出ていった。

楽は一度漣の方を見て、アリスを見て勢い良く頭を下げた。

「お料理、美味しかったです」

楽は頭を上げると同時に後ろを向いて漣の後を追う。

楽が外に出ると漣は船へと歩いていった。

辺りはもう真っ暗で、空に浮かんだ月は消えてしまいそうに細い。

楽は親の後を追う子供のように漣の元へ駆け寄った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0766j/>

彼女の奏でる唄

2010年10月10日05時56分発行